

メッセージアウトライン 創世記41:1～57「奴隷から宰相へ」

[1]「それから二年後、ファラオは夢を見た。見ると、彼はナイル川のほとりに立っていた」

ヨセフは監獄に入って来た献酌官長と調理官長の見た夢を解き明かしてやり、その夢のとおり献酌官長は元の地位に戻され、料理官長は処刑された。ヨセフは献酌官長に自分が監獄から解放されるように願い、望みを託したが、何とそれは忘れられてしまったのである。(40:14~15,23)

ヨセフは失意とさらなる忍耐のうちに暗い監獄で与えられた仕事に励まなければならなかった。そしてそれから二年後のことである。ファラオは夢を見た。彼はナイル川のほとりに立っていた。ナイル川はエジプトを南から北に貫いて流れる非常に大きな川で、エジプトの農業はこのナイル川に依存していた。エジプトの大きな町々もこのナイル川沿いに建てられていた。

[2-4] ファラオは夢の中でナイル川からつやつやした、肉づきの良い雌牛七頭が上がって来て、葦の中で草を食んでいるのを見た。次に醜くやせ細った別の雌牛七頭がナイル川から上がって来て先の雌牛のそばに立った。そして、やせ細った雌牛七頭が良く肥えた七頭の雌牛を食い尽くしてしまった。ここでファラオは目が覚めた。

[5-7] それから彼はまた眠りに落ちた。そして再び夢を見た。それは、よく実った七つの良い穂が一本の茎に出て来て、その後からしなびた、東風に焼けた七つの穂が出て来て、先の七つの良い穂を呑み込んでしまったという夢であり、そのときファラオは目が覚めた。

[8]「朝になって、ファラオは心が騒ぎ、人を遣わして、エジプトのすべての呪法師とすべての知恵ある者たちを呼び寄せた。ファラオは彼らに夢のことを話したが、解き明かすことのできる者はいなかった」

彼らは夢解きの専門家であったが誰もその夢を解くことができなかった。もちろん偽りの解釈をすることもできたであろうが、解き明かすことができないという結論になったのは、そこに神の干渉があったのではないかと考えることができる。

[9-13] その時、一部始終を見聞きしていた献酌官長がヨセフのことを思い出した。「私は今日、私の過ちを申し上げなければなりません」(9) これはかつて献酌官長が元の地位に戻された時、ファラオに彼のことをとりなしてくれるようにと頼まれていたヨセフの願いを忘れてしまっていたことを言っているのである。献酌官長はファラオの前で、自分が投獄されてから解放されてもとの地位に戻されるまでの出来事を話し、自分が見た夢と料理官長の見た夢をヘブル人の若者が解

き明かし、その解き明かしのとおりになったということを伝えた。

[14] それを聞いたファラオは、そのことに望みを託し、使いをやって急いでヨセフを呼び寄せた。彼は地下牢から連れ出された。そしてひげを剃り、着替えをしてからファラオの前に出た。

ひげを剃ったのはエジプト人はひげを伸ばすという習慣がなく、唯一伸ばすのは誰かが死んで喪に服す時だけであった。ヨセフは自分が解放される時が来たと思っただろうか。しかし、実際はそれ以上のことが彼を待ち受けていたのである。

[15] ヨセフが自分の前に連れてこられた時、ファラオはさっそく自分の見た夢のことを話し出した。「私は夢を見たが、それを解き明かす者がいない。お前は夢を聞いて、それを解き明かすと聞いたのだが」

[16] これに対してヨセフは立派な受け答えをする。彼はもったいぶって何か自分に超能力があるように言うのではなく、「私ではありません。神がファラオの繁栄を知らせてくださるのです」と答えた。ここに彼の信仰の成長を見る。親に甘やかされて育った夢見る少年が、兄たちにねたまれて捕らえられ、売られ、エジプトで奴隷として苦しみ、最底辺の生き方をしなければならなかった時にも、主なる神は彼とともにおられ、彼を守り、祝福し、その信仰を成長させ、また人間的にも成長させてくださったのである。彼は「神がファラオの繁栄を知らせてくださるのです」と言って、神に栄光を帰している。彼自身、夢を解き明かすことができるのは、すべてをご存じの神のみで、自分はその神から教えられ、示されるにすぎないということを自覚している。ヨセフのことばはファラオに新鮮な驚きを与えただろう。エジプト中のさまざまな神に通じるすべての呪法師、知恵ある者たちが解き明かせなかったのにヨセフの信じる神が解き明かせるとは…、どういふ神なのだろう。もっとすばらしい神なのか…。

[17-24] それでファラオは自分の見た夢をヨセフに話す。話は先ほどと同じ内容であるが、21節の描写は初めにはなかったものである。これはより詳しい正確な内容なのであろう。「ところが、彼らを腹に入れても、腹に入ったのがわからないほど、その姿は初めと同じように醜かった」(21)「……そこで私は呪法師たちに話したが、だれも私に説明できる者はいなかった」(24)

[25] ファラオの話をじっと聞いていたヨセフは、聞き終わるとただちに解き明かしを始めた。

「ファラオの夢は一つです。神が、なさろうとしていることをファラオにお告げになったのです」

[26-28] 七頭の立派な雌牛は七年のこと、七つの立派な穂も七年のことそれは一つの夢である。七頭の痩せた醜い雌牛は七年のこと、東風に焼けた七つの穂も同様で、それは七年の飢饉を意味する。そしてそれは、「神がなさろうしていることをファラオに示されたのです」とヨセフは説明する。

[29-32] 今すぐ、エジプト全土に七年間の大豊作が訪れようとしている。(29) その後、七年間の激しい飢饉が起こり、豊作のことはすべて忘れられ、地は荒れ果てる。(30-31) 夢が二度繰り返されたのは、神がすみやかにこれをなさるから。(32)

神からファラオに与えられた夢を解き明かし説明するヨセフのことばは、そのまま来るべき十四年間の神のみわざの宣言に他ならない。彼は神から示されたがゆえにこのように断定的に語る事ができたのである。

[33-36] ヨセフのことばはこれだけでは終わらなかった。彼は来るべき十四年間に予告するだけでなく、そのためにどうすればよいかをファラオに進言する。このような知恵や必要な判断も神によって与えられたものであったであろう。① さとくて知恵のある人を見つけ、その者をエジプトの地の上に置くこと。(33) ② 国中に監督官を任命し、豊作の七年間に収穫の五分の一を徴収すること。(34) ③ その集めた食料は来るべき七年の飢饉のための蓄えとし、保管すること。そうすればエジプトは滅びることはない。(35-36)

[37] 「このことは。ファラオとすべての家臣たちの心になかった」

ファラオとその家臣たちはヨセフの解き明かしを聞いて、事態の重大性に気づき呆然としたのではないだろうか。彼らはこの時、ヨセフがヘブル人の奴隷であり、しかも牢獄から連れ出された者であることなどほとんど意識しなかったであろう。彼らの前に突然現れたヨセフの存在は驚くべきものであった。ヨセフは彼らの心になかった。

[38-41] ファラオはヨセフを神の霊の宿っている人と認め、「神がこれらすべてのことをおまえに知らされたからには、おまえのように、さとくて知恵のある者は、ほかにいない。おまえが私の家を治めるがよい。私の民はみな、おまえの命令に従うであろう。私がまさっているのは王位だけだ」(39-40) と言った。「私の家」とはすなわちファラオが支配するエジプト全土のことである。「さあ、私はおまえにエジプト全土を支配させよう」(41) ヨセフは暗い地下牢にいた奴隷の身分から、突如としてエジプト全土を支配する者へと変えられ、引き上げられたのである。

[42] 「そこで、ファラオは自分の指輪を指から外してヨセフの指にはめ、亜麻布の衣服を着せ、その首に金の首飾りを掛けた」

これはヨセフがファラオによって、その地位に任じられる就任の儀式である。ファラオの指輪は王の印が刻まれている。亜麻布の衣服は宮廷で着る服、金の首飾りは高貴な者のしるしであろう。

[43] 「そして、自分の第二の車に彼を乗せた…」これはエジプトの第二の権力者のしるしである。

ヨセフの行くところどこでも人々は彼の前でひざまずかなければならない。こ

のようにしてファラオは彼をエジプト全土を支配する者とした。

[44]「…私はファラオだ。しかし、おまえの許しなくしては、エジプトの国中で、だれも何もすることができない」

このことばの意味は、私がファラオであることに変わりはない。しかし、全国民はあなたの指示によってのみ動く、という意味であろう。

[45]「ファラオはヨセフにツァフェナテ・パネアハという名を与え、オンの祭司ポティ・フェラの娘アセナテを彼の妻として与えた。こうしてヨセフはエジプトの地を監督するようになった」

「ツァフェナテ・パネアハ」…「神は語り、彼は生きる」の意。

「オン」ナイル川の河口から約160キロメートルほど上流に行った地で太陽神(ラー)礼拝の中心地であり、その祭司はエリート中のエリートであった。ファラオはその祭司の娘をヨセフの妻にして与え、こうしてヨセフはエジプトの地を監督する者となった。

エジプト名への改名、オンの祭司の娘との結婚、やがて対面する彼の兄弟たちが気づかないほどの完璧なエジプト語の習得……このようにしてヨセフはエジプト文化に完全に同化したように見える。しかし、それはあくまでも表面的なものであり、彼はすでにイスラエルの神についてファラオの前で大胆に告白しており、その信仰の独自の立場は人々に十分に受け入れられていたと思われる。彼が偶像礼拝をするとは決して思われない。ヨセフのエジプトへの同化とヘブル人としての立場の関係はエジプトを飢饉から救い、やがてイスラエルをも救いに導く役割を果たすために大きな意味があったと考えられる。

[46]「エジプトの王ファラオに仕えるようになったとき、ヨセフは三十歳であった。ヨセフはファラオのもとから出発してエジプト全土を巡った」

ヨセフは十七歳のときに兄たちにねたまれ、捕らえられてエジプトに売られたので(37:2)、もうそれから十三年たっている。しかし、この十三年間の労苦、忍耐は決して無駄ではなく、彼に豊かな品性と実り、そして信仰の成長をもたらしたのであった。もし、二年前にあの献酌官長の夢を解き明かした時点で、彼が牢獄から解放され、故郷のカナンの地に帰っていたならば、彼はエジプトもイスラエルも救いに導くということはできなかったであろう。それゆえここにすべてのことを支配され、物事を最善に導かれる神のご計画というものがあることがわかる。→詩篇 105 : 16~24

[47-49] ヨセフの夢の解き明かしのごとく、豊作の七年間が続く、ヨセフはエジプト全土を巡って食料を町々に蓄えた。そのために多くの倉庫も建てたであろう。それらの倉庫いっぱい海の砂のように非常に多く蓄え、量りきれなくなったので、ついに量るのをやめた。

[50~52]「飢饉の年が来る前に、ヨセフに二人の子が生まれた」これも神の祝福である。

長子は「マナセ」…「忘れる」という語の語根「ナシャ」の派生語。その意味は「神が、私のすべての労苦と、私の父の家のすべてのことを忘れさせてくださった」(51)からである。兄たちによってもたらされた苦痛、怒り、憎しみが過去のものとなったのである。

二番目の子「エフライム」…「実り多い」という語の語根「ファラ」の派生語。その意味は「神が、私の苦しみの地で、私を実り多い者としてくださった」(52)からである。

[53~54] さて豊作の七年間が終わると、やはりヨセフの言ったとおりの七年の飢饉が始まった。しかし、エジプト全土には食物があった。これはヨセフの管理するエジプト国家のものである。国民一人一人はそれほど蓄えていなかったかもしれない。

[55] 「やがて、エジプト全土が飢えると、その民はファラオに食物を求めて叫んだ」

国家としての対応が問われるところである。ファラオは全エジプトに言った。「ヨセフのもとに行き、ヨセフの言うとおりにせよ」ファラオはそのためにヨセフを立てたのであった。

[56-57] 「飢饉は地の全面に及んだ。ヨセフはすべての穀物倉を開けて、エジプト人に売った。その飢饉はエジプトの地でもひどくなった。全地は、穀物を買うためにエジプトのヨセフのところに来た。その飢饉が全地で厳しかったからである」

このようにして、飢饉という一見何の関係もない出来事を通して神の救いのご計画は動き出し、エジプトそしてイスラエルの救いのためにヨセフが用いられることになるのである。

ヨセフの奴隷としての十三年間は決して無駄ではなかった。それはヨセフにとって苦しいけれども必要な時であり、神の救いのご計画の準備期間とも言えるものであった。そして神の時が来た時に彼は奴隷の身分からエジプトの宰相すなわち総理大臣の位にまで一挙に引き上げられたのである。誰がそんなことを考えることができたであろうか。神のなさることは不思議で測り知りがたい。しかしそれは最善の時、最善のタイミングで実現する。私たちはこの主なる神のみわざをほめたたえるのみである。

私たちもどのような困難や苦しみの中に置かれていようとも必ず、主がそれらを相働かせて益としてくださり、御栄光を現してくださり、私たちに希望と喜びを与えてくださると信じる。ヨセフの神はまた私たちの神である。そして何よりも素晴らしいのは、罪と死の奴隷となっていた私たちを神の御子イエス・キリストがその十字架の死による贖いによって私たちを救い、神の子としてくださることにある。それゆえ、不信仰になったり、自暴自棄になったりしないで、主が最善をなしてくださることを心から信じて、忍耐をもって日々の信仰生活に励む者となっていくことが大切である。